

【1面参照】
 常総学院 常総学院(茨城)を2-0で下した。
 常総学院は三回まで走者を出せなかったが、四回に常総の先発・飯田晴海を攻略。1死から2番川原諒平が右前打で出塁すると、続く大竹耕太郎がセンターフェンス直撃の三塁打を放って1点を先制した。4番安藤太一の打席では飯田の暴投で大竹が生還し、1点を加えた。

選抜 第85回 高校野球

濟々覺 初戦突破

<第5日>

常総学院 濟々覺(12時45分、26000人)

常総学院 (茨城) 0000 02000 00000 02

濟々覺 0000 00000 00000 02

▽三塁打 大竹▽二塁打 内田▽犠打 林、高島、進藤
 飯田▽捕逸 安藤▽暴投 飯田
 △試合時間 1時間41分



【濟々覺—常総学院】常総学院打線を無四球で完封した濟々覺のエース大竹

大竹決勝打 冷静に完封



【濟々覺—常総学院】4回表、濟々覺1死一塁。大竹が中越えに先制の適時三塁打を放つ。甲子園(谷川剛)

きのこの結果

▽2回戦 (延長13回)
 濟美 4-3 広陵
 濟々覺 2-0 常総学院
 敦賀 6-5 京都翔英

濟々覺 — 常総学院

打者	得点	安打	盗塁	犠打	犠飛	失点	失球
川原諒平	0	0	0	0	0	0	0
大竹耕太郎	1	1	0	0	0	0	0
内田洋平	0	0	0	0	0	0	0
林高島	0	0	0	0	0	0	0
進藤	0	0	0	0	0	0	0
飯田	0	0	0	0	0	0	0
計	29	24	1	1	1	2	10

投手	成績	回	打	安	点	振	球	失	失
飯田	9	32	14	4	11	2	2	2	2

エース進化 要所で緩急自在

昨夏、優勝校・大阪桐蔭に敗れた左腕が気を吐いた。「悔しさを晴らす」と冬場に取り組んだことの成果が出た。濟々覺のエース大竹耕太郎は、大舞台で進化ぶりを存分に披露した。

打者を打ち取る「引き出し」を増やしていた。八回2死二、三塁。常総学院の打席には2安打の4番内田靖人。最大のピンチだった。

でも動じなかった。内田のしびさや、それまでの打席を頭に入れ、「相

手は打ち気満々。直球を待っていたのが分かった。冷静に見透かすと、新球のチェンジアップで空振り三振に仕留めた。

切り替えも早かった。序盤、得意のスライダーが甘くなって痛打されると見切りをつけた。直球主体にチェンジアップやフォークボールを織

り交ぜ、攻め立てた。体づくりに励んだ冬場は連投を見越し、球数を抑える「省エネ投法」も探った。その思い通り、緩急も縦横の変化を駆使して相手の裏をかき、105球で甲子園初完封。「2桁安打されてもゼロに抑えるのが理想」と口にしては、投球を成し遂げ、「一楽に投げられた。狙い通り」と納得の表情だった。

バットでも貴重な先制点をたたき出す。四回の1死一塁。「前の打席

に三球とも同じ球で三振にやられた」という内角直球を狙い打ちし、センターフェンスを直撃する三塁打にした。「打席では投球に比べれば緊張はない。相手捕手との駆け引きを楽しめた」と余裕すら見せた。

スタンドでは大応援団が見守っていた。「期待が大きいのは分かっている。でもプレッシャーでなく力に変えていきたい」。55年ぶりのセンバツ勝利の立役者は冷静だった。(坂本尚志)

【評】息詰まる投手戦はワンチャンスを確実にものにした濟々覺に軍配。エース大竹は無四球完封に決勝打と投打にわたり活躍した。

大竹は被安打9ながらもボールを低めに集め、緩急を駆使した投球術が光った。再三のピンチにも、冷静に後続を打ち取った。新球種のチェンジアップやフォークなど縦横の変化球が要所で威力を発揮。

バックも無失策でもり立てた。打線は持ち前の集中力を発揮。四回1死一塁から大竹の中堅フェンス直撃の三塁打、その後の暴投で2点を奪った。ただ、送りバントを連続で失敗するなど課題も残った。

常総学院の飯田は11奪三振と力投。攻撃陣は何回も好機をつくったが、8残塁とあと一本が出なかった。(坂本)

監督談話

応援が力に

監督 池田満頼 (センバツで55年ぶりの勝利は、大変うれしい。昨夏の全国選手権と同じように、スタンドの応援がチームの力になった。先制点は予想してなかったが、少ないチャンスを生かし、いつも通りの野球ができた。次は速球派の安藤投手が相手。しっかりと対策をして臨みたい。)

攻めきれず

常総学院・佐々木力 監督 うちの打線が大竹君を攻めきれなかった。9安打はしたが、低めへの球や伸びのある球にずっと翻弄(ほんろう)されていた。

カギ手

◇中川光志主将 守備は無失策と納得いく内容だったが、攻撃では三振を少なくしてバントで攻めるという野球ができなかった。次戦までに修正したい。

◇安藤太一捕手 試合前に大竹から横系の変化球が良くないと聞いたので、真っすぐ主体で投球を組み立てた。出来は60〜70点だったが要所で低めに決めてくれた。

◇田口貴雄内野手(伝令でマウンドへ) 九回1死一、二塁の場面では長打が怖かったので大竹には「とにかく低めに投

げる」と伝えた。